メガテン３とプリコネRで

シュテッヒパルム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

混沌王陛下が、女の子とイチャイチャしたいのコトワリ『繋』を啓いたらしい

目　次

エピローグ／プロローグ ―――― 1
デビルサマナーの黒猫 ―――― 6

エピローグ／プロローグ

東京が死んで生まれた、まんまる卵の内側の世界。
その中心まで伸びた高い高い太陽の塔（カグツチ）。
その天辺で行われた戦いが終わったとき、生きて立っていたのはユウキとアメスの二人だけだった。
ユウキは息を吐いて座り込むと、最初はミラーボールのようで、追い詰めたらデッカイ顔のように変形した太陽の化身が崩れ去っていくのボーっと見つめる。
「あー、しんど。でも、これでようやく終りね……いえ、始まりかしら」
ユウキに身を寄せるアメスも、やはり感慨深そうだ。
出会ったころは小さな妖精だった彼女だが、今では人間の女性と変わらないサイズになっている。
「なに？　こっちジーっと見つめちゃって……。なに？　惚れ直した？」
彼女の昔の名前と姿を思い出し、それからそれにつられてここまでの冒険を振り返っていたことを話す。
ロクなことのなかった旅路のはずなのに、何故だか自然と笑みが浮かんでくる。

「アタシもそうだけど。アンタも変わったわよね。最初はすごくヨワソーに見えたのに、こんなとこまで来て、最後には全部倒して勝っちゃうしさ。人の頼みを聞いてばっかで、知り合いを助けたいとか言ってあっちこっち走り回って、お人好しが過ぎるバカなんじゃないかって思ってたのに……そこは今も変わってないのかしら？」

ただの男子高校生だった。この先の進路、将来の仕事、どうやって生きていくのか。そんなことに悩む普通の少年だった。

それが訳も分からないまま、新しい世界を創る権利を巡る戦いに巻き込まれて、世紀末でヒャッハーみたいになってしまった東京で、戦って、戦って、戦って、利用されて、騙されて、いい様に使われて、それでも頼まれたら引き受けてしまって、戦って、戦って、殺して、殺して、殺した。

「ホント、よくやったわよねアタシ達」

ポツリポツリと思い出話を躱していると、やがて視界が白く染まり始めた。

この卵の中身の形になった東京が生まれ変わる時が来たのだ。

「それで、このまっさらになった世界。ここにアンタは何を描くの？　結局何も決められなかったんでしょ？」

倒して…いや、殺してきた人たちにはみんな確固たる新世界のビジョンがあった。

でも、それはユウキの感性では受け入れられないものばかりで……。彼ら、彼女らの

願いを否定した結果、争うことになってしまった。
そうして起こった殺し合いの果てにユウキは生き残った。勝って、願いをかなえる権利、新世界を創造する力を手にしたけれど……。
「このままこの真っ白な世界にずっと二人でいる？　アタシは別に……それでもいいけど」
どうするの？　と問いかけてくる彼女に、ユウキは思い付きを語った。
いや、それはハッキリとした言葉に出来ていなかっただけでずっと心のうちにあった考えだったのだろう。
そうでなければ、きっと勝ち抜くことは出来なかっただろうから。
「いや、それで出てくるのが『剣と魔法のファンタジー』って……アンタさ、ラノベの読みすぎじゃないの？」
否定は出来ない。でも、悪くはないと思うのだ。
人が人として、生きられる世界。
人が懸命にならなければ生きていけない世界。
強者が強者として評価と敬意を受ける世界。
強くあればたった一人でもどうにかなる世界。
神々が支配した神話の時代でも、科学の進んだ現代でもない、英雄たちが活躍する伝

説の時代。
「それってさ、アイツらの願ってた世界よね。ま、いいけど？　アンタがそれでいいなら」
　真っ白でまっさらな新しい世界の白身。そこに思い描いた形が浮かび上がる。
「はぁ!?」
　その内容を読み取ったアメスは、ちょっと淑女としてはよろしくない声を上げた。
「カワイイ女の子と遊んだりして癒されたいって……これ、アンタの願望混じってるじゃない!?」
　言い訳をするのなら、
　ユウキは疲れていたのだ。
　ユウキは荒んでいたのだ。
　別に特別メンタルが強いわけではなく、ちょっと危険なことにも突っ込める度胸があって、人に頼まれたら大概頷いてしまうだけの少年が、あまりにも殺伐とした環境に置かれてきたのだ。
　癒しを求めてしまっても仕方ないじゃない。
「仕方ないじゃない、じゃないでしょ。どーすんのよこんなの！　怒られるわよ、たぶん、なんかこう、金髪の子供とか、車いすのお爺ちゃんとか、そんな感じのに！」

もう創世は止められない。

敗者たちの想いとか、そんなことはなんだかもう……『どうでもいい』。

結城理（ユウキマコト）は、なんだかとてもそんな気分だったのだ。

男子高校生が、女の子とコミュりたいのは自然の摂理。これはもうどうしようもない本能だ。

「あー、もー、しょうがないわね」

ユウキが伸ばした手をアメスが掴んだ。

まっさらな世界が色づき始める。新しい世界が生まれるのだ。

勝利を掴んで願いをかなえる権利を手に入れた。そんなハッピーエンドのその先へ

――

自分以外はみんな死んでしまった、殺してしまった。後味悪いバッドエンドのその先で――

「もう一度、アンタと旅してあげるわよ!!」

――もう一度、キミと旅する物語。

デビルサマナーの黒猫

空に輝く太陽は燦燦と、春の陽気は麗らかに、そよぐ風に短い草がざわめく。
黒く長い髪の少女がそんな平原を歩いていた。身体の揺れに合わせて、少女の前髪に入った白いメッシュもユラユラと揺れていた。
「なんでこんなとこ行かなきゃなんないのよ……」
地図を手にトボトボと歩む重い足取りは、今の少女の心境そのまま。猫の獣人族の証である少女の尻尾と耳もしょんぼりとヘタレている。
「なにが金星のお告げよ。頭おかしいんじゃない」
ある日突然両親から地図を手渡され、『金星の神様からお告げがあったから、お前はその地図の場所にいらっしゃる陛下にお仕えしなさい』などと言われたら、そりゃあドンヨリした気分にもなる。少女自身は神様なんて胡散臭い者はまったく信じていないのだからなおさらだ。
本当に人を助けてくれるような神様がいるのなら、もっとマシな生活を送ってこれたハズなのだ。
「はぁー、それでもまぁ、あのまま家にいるよりマシかもしれないしね」

口にしたこととは裏腹に、少女はまったく期待してはいなかった。ロクに子供の面倒もみない両親。おかしな行動ばかりする父母。そのせいでバカにされたり遠巻きにされたり、イジメにあったりした結果、人付き合いが苦手で、ついつい乱暴な口調になってしまう性格に育ってしまった自身。

自分も、親も、周りの環境も、何もかも嫌いだった。

だから、そこから去ってどこか遠くへ行きたい。家出したいと思ったことは何度もある。というか毎日だった。

それが実行できなかったのは、この猫獣人族の少女――キャル――に力がなかったからだ。

学校ではつらい思いをしていただけで勉強はほとんど出来なかった。腕っぷしが強いわけでもない。専門技術もなければ、商才もあるとは思えず、人付き合いは苦手ときている。

こんな状態で家を出て行ってもお金は稼げそうにない。早晩、飢えてひもじい思いをすることになるのは目に見えている。

顔にはわりと自身があったので、あるいは身体でも売れば――などと考えたこともあったけれど、14歳の少女の心はそういった稼ぎ方を良しとはしなかったのだ。

「もしかして捨てられたのかなぁ……」

『金星のお告げ』とかなんとかヘンなことを言って、両親は邪魔になった娘を追い出したのではないか。そんな思考も混じってくる。

あれでも一応はキャルの親で、飢え無いようにだけはしてくれていたのだ。

愛情があったのかどうか、よくわからない。でも、イラナイと言われたのだと考えてしまうと凹む。

これからどうしよう。どうやって生きていこう。

思い悩み時々立ち止まりため息を吐きながら、少女は歩む。

頭のおかしい両親の言うことだ、その『陛下』なんてのはいやしないだろう。でも、一応、地図の場所に行くだけ行ってみて、それからその先のことを考えよう。

今後の身の振り方も定まらないキャルは、とりあえずの目標としてその場所へと向かっていたのだ。

王都ランドソルの上空にそびえる謎の巨大建築物『太陽（ソル）の塔』、最近になって突如海上に現れたというこれまた謎の巨大建築物『月（ルナ）の塔』。頂上が霞んで見えない途轍もない高さのこの二つの塔は良い目印だ。何せ大陸中のどの山々よりも高いのだから、現在位置を知るにはもってこいの代物である。

「えーっと……この辺りよね？」

たぶん、と付け加えながらキャルはキョロキョロと周囲を見渡しながらうろついた。

そうしてしばらく探していると、ゆるやかに流れる小川のほとりに人影を見つけた。

「あれが『陛下』？」

もしかしたら全然関係ないただの旅人かもしれない。関係のない人に、いきなり「あなたが私の陛下ですか？」なんて聞いて「は？」とか呆れたような目で見られたらどうしよう。

なんて悲観的な想像と、万が一あの人が本当に両親の言っていた『陛下』だとしたらそれはそれで嫌だなという嫌悪感がキャルの中でないまぜとなった。

でも、ここで行かなければ何のためにこんなところまでヒーヒー言いながらやって来たのかわからなくなってしまう。

「よし！」

気合の独り言とともに拳を握りしめ、キャルは恐る恐るへっぴり腰で川べりの人影の背中へと近寄って行った。

「あ、あのー？」

キャルの呼びかけに応えて振り向いた人は、上半身裸の男性だった。肌色！　とりあえずキャルから彼への第一印象はそれだ。

結構鍛えてるなーとか、自分と同じ黒髪なんだーとか、目に力があるなーとか、なんというかこう妖しいというか雰囲気のある美形だなーとか、少し年上なのかなーとか、

イロイロあったけれどとにかく上半身の裸体がキャルの目に焼き付いたのだ。
　いや、背中の時点で気づけよとキャル自身思うのだけれど、なんて言って声かけようかとそれだけで頭の中がいっぱいいっぱいだったのだから仕方ない。
「やっと来たわね。一応確認しとくけど、アンタの名前『キャル』で合ってる？」
「あ、え？」
　男が高い女の子のような声でしゃべった？　とキャルが驚くと、彼の肩の上にニュっと小さな顔が現れた。その小さな顔の持ち主には虫のような半透明の翅のついていて、身体のサイズは手のひらに乗る人形くらい。
「よう、せい……？」
「そ、今はネビアって名乗ってるわ。ま、よろしくね」
「えっと、じゃあ……その『陛下』っていうのは、アン、あなた、です、か？」
「ああ、それはこっち。コイツのことよ」
　そう言って、妖精『ネビア』は男の耳を引っ張った。
『ユウキ』と名乗り、今後ともヨロシクと言ってくる彼に不格好な会釈をして、キャルがすぐに視線をそらした。
　何か着なさいよ！
　なんだかとても恥ずかしい。頬が紅潮して、汗がダラダラ流れているのが自分で分か

る。

夏（サマー）でもないのに、どうしてコイツは水着みたいな格好してるんだコンチクショー。

「アタシはコイツのナカマってこと。まー、キャルの先輩ってことになるわね。敬っていいわよ」

「いや、その、えーっと……」

親の言っていた『陛下』が、本当にいるなんて思っていなかった。なんだやっぱり誰もいないじゃないか、何が神様のお告げだバーカ！

そんな風に叫んで、それからどこか……故郷から遠く離れたところにでも行こうと思っていたのだ。たとえば、そう大陸の中心なんて言われてる『ランドソル』とか、そんなところへ――。

「あー、もしかして恥ずかしがってる？　コイツがこんな格好だから。初心ね～」

どう答えたものか迷う間もなく、キャルはコクコクと何度も頷いてしまっていた。

「服、頼んでなかった？　そのお告げの方から」

「あ……」

そういえば、とキャルは思い出し慌てて荷物の中から男性用の衣類を取り出した。

ズボンに上着に、マントに、諸々。この大陸では割とありがちな旅人っぽい服だ。

それをキャルが手渡すと、ユウキは大喜びで着替え始めてしまうではないか！
「ちょっ！　いきなり着替えるなー！」
ユウキの手が彼が今まではいていた短いズボンのベルト辺りにかかったところで、キャルはぐるっと勢いよく後ろを向いた。
なんであんなに嬉しそうにしてんのよ！　もしかして、そういうのを見せつけて喜ぶ変態不審者なんじゃないでしょうね！
プルプルと嫌な想像を交えつつ、羞恥に悶えるキャル。そんな彼女の猫耳は、背後から聞こえてくる衣擦れの音に反応してピクピクと動いていた。
「は？　何か欲しいものはないか……ですか？」
着替えを終えたユウキは、これからキャルが彼の仲間になるにあたって支度金のようなものを出そうと言ってきた。
ついてくるのなら、欲しいものをやると言うのだ。
正直、命令されたらそのままついていったような気がする。
キャルはこれまで、なんだかんだ言いながらも結局は両親の言うままに生きてきて、言われたとおりにしてきたのだから。その相手が変わるだけ、飼い主が親から、この陛下になるだけだから。
「なんでもいいから、何か言ってみなさいよ。言うだけならタダなワケだし？」

頭の上に乗っかってきた妖精が、微妙にむかつく声音でそう言ってくる。自分の望みを口にすることを恐れるキャルを、臆病だとバカにしているような調子で。

「何か欲しいものないの？　この場にないものでもいいわよ？　アタシ達には別にどうしてもって目的があるわけでもないし、キャルの願いを叶えてあげるって言ってるの」

「叶えるって、なん、で？」

「ま、暇つぶしね。ホントにさ、何にもないのよ。とりあえずブラブラしてみるかーってくらいにしか。物見遊山、ってやつ？　だったら、まぁ困ってそうな人でも探してみようかなってことになって、それでアメスとして適当に見繕ったのが、アンタってわけ。ぶっちゃけるとね」

ネビアが何を言っているのか、キャルにはその意味がよくわからなかった。

向こうも理解させようとは思っていなさそうだ。

「だからさー、なんでもいいから試しに言ってみなさいよ」

欲しいもの。欲しかったもの。

親にもっと構ってほしかった。友達が欲しかった。もっといろいろしてみたいことがあった。

お金がないと、生きていくのが辛い。技能があれば、知識があれば、もっとちゃんと話せたら……。

「あたしは……『力』が欲しい」
でも、とりあえず。『力』があれば、独りでも生きていける。
この大陸はそういうところだ。口が悪くても、品がなくて人と付き合うのが苦手でも、お金を稼ぐのが下手糞でも、とりあえずはなんとかなる。
だから、まずは『力』が欲しい。
「そ、じゃあちょうど良かったわね」
ネビアとユウキは顔を見合わせて、頷き合った。
「ちょっとね、人としてやっていくにはコイツの持ってる力が大きかったからさ。その一部をキャルに分けてあげる。『悪魔』……この世界だと『魔物』か。魔物と言葉を交わし、支配し、召喚し、使役する力を……ね」
ユウキ……『陛下』の手のひらが光を放ち始めた。
「なに、それ……」
光が集まって、固まって、宝玉のようなものが生み出された。
そして、それを、『陛下』は何かとてつもなく恐ろしい者に出会ってしまったかのように震えるキャルの口の中に、押し込んでくる。
「がぁっ！」
熱い。宝玉が通っていた喉が焼けそうだ。頭がクラクラする。

ガチガチと歯が勝手に動いて舌をかみ切りそう。何かを噛んでいる。思いっきり。

これは、指？『陛下』の？

目が回る。頭の中が沸騰する。

「キャル……アンタはデビルサマナーになるのよ。望みどおりにね」